

太陽
シリーズ

太陽正倉院シリーズⅢ

●監修＝松島順正・木村法光

正倉院と東大寺



正倉院と東大寺

●カラー	正倉院と東大寺	4
	正倉院に憶う	8
	書跡文書と文房具	14
	楽器と楽具	22
	装身具	37
	東大寺と正倉院	40
	仏具と荘厳具	42
	調度	97
	飲食器	113
	江戸の正倉院開封図	62
●本文	近世の正倉院開封	68
	東大寺建立と正倉院	75
	正倉院の愛すべき箱たち	82
	正倉院宝物の伝来と東大寺	89
	大仏開眼会の楽舞と正倉院楽器	119
	東大寺法華堂と正倉院	124
	明治の開封	126
対談	熾烈なる光と影の天平工芸	132
作品解説	正倉院宝物に学ぶ	
表紙・扉掲載作品解説／編集室	熊谷公男	137
●表紙＝鳥毛立女屏風・第二扇(部分) 正倉院宝物	木村法光	
●写真＝矢沢邑一・矢野建彦・宮内庁正倉院事務所・奈良国立博物館・東大寺図書館・便利堂・県立奈良図書館・日本地図センター	北村昭斎	
●装画＝藤田道世 ●編集スタッフ＝佐藤信二 ●レイアウト＝スタジオ・ギブ	高橋隆博	



◎掲載品所蔵者・編集協力

鳥毛立女屏風・第二扇 正倉院宝物	天平宝物筆 正倉院宝物
東大寺山界四至図 正倉院宝物	金銅鎮鐸 正倉院宝物
四聖御影 東大寺蔵	水精玉と曲玉 正倉院宝物
国家珍宝帳 正倉院宝物	雑色瑠璃玉 正倉院宝物
紫紙金字金光明最勝王經 奈良国立博物館蔵	不空絹索観音像宝冠 東大寺蔵
最勝王經帙 正倉院宝物	碧地彩繪几・第十五号 正倉院宝物
西大門勅額 東大寺蔵	粉地木理繪長方几・第十四号 正倉院宝物
雑集 正倉院宝物	粉地彩繪長方几・第十二号 正倉院宝物
経師手実 正倉院宝物	粉地彩繪几・第十号 正倉院宝物
染穀論 正倉院宝物	粉地彩繪八角几・第十一号 正倉院宝物
隠伎国郡稻帳 正倉院宝物	蘇芳地六角几・第二十七号 正倉院宝物
墨絵人物 正倉院宝物	粉地金銀絵八角長几・第六号 正倉院宝物
筑前国嶋郡川辺里戸籍 正倉院宝物	彩繪長花形几・第十八号 正倉院宝物
摂津国嶋上郡水無瀬庄絵図 正倉院宝物	蘇芳地彩繪箱・第二十九号 正倉院宝物
越中国射水郡須加野開田地図 正倉院宝物	緑地彩繪箱・第三十一号 正倉院宝物
筆 正倉院宝物	沈香斲形木画箱・第十二号 正倉院宝物
紅牙撥鐮尺 正倉院宝物	碧地金銀絵箱・第二十四号/第二十五号 正倉院宝物
螺鈿紫檀阮咸 正倉院宝物	金銀平脱皮箱・第四号 正倉院宝物
金銅平文琴 正倉院宝物	籠箱 正倉院宝物
彫石横笛 正倉院宝物	金銀絵木理箱・第二十二号 正倉院宝物
刻彫尺八 正倉院宝物	紫檀木画箱・第十七号 正倉院宝物
磁鼓筒 正倉院宝物	密陀彩絵忍冬鳳文小櫃・第十四号 正倉院宝物
呉竹笙 正倉院宝物	鯨鬚金銀絵如意 正倉院宝物
呉竹竿 正倉院宝物	黒柿蘇芳染金銀絵如意箱 正倉院宝物
伎楽面 正倉院宝物	白銅柄香炉 正倉院宝物
面・醉胡王面 正倉院宝物	漆金薄絵盤 正倉院宝物
布作面 正倉院宝物	金銀花盤 正倉院宝物
大歌半臂 正倉院宝物	銀壺 正倉院宝物
笛吹機 正倉院宝物	麻布菩薩像 正倉院宝物
呉公前垂 正倉院宝物	☆ ☆
犀角把白銀彫形鞘珠玉狂刀子 正倉院宝物	天保四年正倉院御開封之図 東大寺図書館蔵
三合鞘御刀子 正倉院宝物	元禄六年正倉院御開封之絵図 東大寺図書館蔵
御冠残欠 正倉院宝物	元禄六年正倉院御開封行列図 (彩色) 正倉院蔵
衲御礼履 正倉院宝物	(白描) 東大寺図書館蔵
繡線鞋 正倉院宝物	
開眼縷 正倉院宝物	

平螺鈿背円鏡・第十一号 正倉院宝物
鳥毛篆書屏風 正倉院宝物
鳥毛帖成文書屏風 正倉院宝物
鳥毛立女屏風・第四扇 正倉院宝物
山水夾幘屏風 正倉院宝物
鹿草木夾幘屏風 正倉院宝物
象牙木縹緞屏風 正倉院宝物
漆皮金銀絵鏡箱・第十三号 正倉院宝物
漆皮金銀絵八角鏡箱 正倉院宝物
漆皮鏡箱・第八号 正倉院宝物
銀平脱鏡箱・第五号 正倉院宝物
赤漆鏡箱 正倉院宝物
白葛箱 正倉院宝物
赤漆文櫬木厨子 正倉院宝物
銅黄妒 正倉院宝物
古櫃・第一九九号 正倉院宝物
銀平脱合子 正倉院宝物
銀平脱竜船墨斗 正倉院宝物
楊足几 正倉院宝物
長斑錦帙 正倉院宝物
紫地鳳形錦帙 正倉院宝物
花氈 正倉院宝物
二彩平鉢 正倉院宝物
白瑠璃高环 正倉院宝物
白瑠璃瓶 正倉院宝物
白瑠璃碗 正倉院宝物
佐波理匙 正倉院宝物
佐波理加盤 正倉院宝物
漆彩絵花形皿 正倉院宝物
瑪瑙环 正倉院宝物

◎写真(番号はページ)
矢沢邑一 11下、16上、18、46、47
矢野建彦 6、8、10、12、13、62、73

THE SUN Series No. 27 Shōsōin Series III Shōsōin and Tōdaiji

Shōsōin was formerly a warehouse belonged to Tōdaiji. In the eighth century it was called Tōdaiji Shōsōin. (In those days even the emperor had his own main warehouse and the area was called "Shōsōin". But only "Tōdaiji" remained to-day and Shōsōin is used as a proper noun.) On April 9th, 752 there was a very important religious festival in the eighth century called "Tōdaiji Daibutsu Kaigen" (Buddhist ceremony on consecrating a newly made image of Tōdaiji). On this day treasures were offered to Tōdaiji. Among these were a number of art treasures in Buddhist altars, stationery, etc. which have been preserved in their original condition. The theme of this volume is a relationship between Shōsōin and Tōdaiji. Color pages

- * Main warehouse of Shōsōin (Pp. 8 ~ 9), a close-up of its door (P. 10) and historic buildings in Shōsōin (Pp. 12 ~ 13)
- * Documents recording about the country in the eighth century and drawings (Pp. 14 ~ 21)
- * Buddhist altars, masks and costumes (Pp. 22 ~ 36)
- * Buddhist ornaments (Pp. 37 ~ 39)
- * Treasures stored on a Buddhist altar, ornaments (Pp. 42 ~ 61)
- * Paintings (Pp. 97 ~ 112)
- * Tableware (Pp. 113 ~ 118)
- * Buddhist sutras (Pp. 62 ~ 73)
- * Every period someone checking and inventory on the Shōsōin Treasures had been done. These were drawings at the time of checking in 1693 and in 1833.
- * Drawing depicting a procession of the officials going to the ceremonial site of Shōsōin in 1693 (Pp. 71 ~ 73)
- * Complete drawing of the checking in 1833 (Pp. 62 ~ 63) and a close-up of a part of the drawing (Pp. 64 ~ 70)
- * About 600 people are painted there.

EDITOR: Shinji SATO

正倉院は周知のとおりもと東大寺付属の倉であって、東大寺正倉院といわれていた。ここに納められているものは聖武天皇ご遺愛の品々で、その崩後光明皇太后が先帝のために東大寺の本尊盧舎那仏に奉獻し、その冥福を願われたのである。これらの宝物は施入目録ともいうべき献物帳が添えられていて、便宜この宝物を「帳内宝物」と呼んでいる。正倉院にはこの帳内宝物より量においてはあるかに多くしかもこの中には質においても帳内宝物に比肩すべき宝物が多数含まれている。この帳外宝物は平安中期に東大寺羅索院双倉から移納したものが大部分であって、東大寺の重物什宝として伝存されたものである。

このような由緒ある正倉院宝物は用途・材質・技法の上から見ても非常に高い水準にあった奈良朝工芸の各般にわたりうかがうことができる。またここに襲蔵する膨大な量の書跡文書は、当代政治経済文化の実態を知る重要な資料であることは改めていうまでもない。

正倉院と東大寺



監修
松島順正・木村法光
図版選
松島順正・木村法光
文
白洲正子・清水公照・武部敏夫
写真
矢沢邑一・矢野建彦
宮内庁正倉院事務所
奈良国立博物館・東大寺図書館
便利堂・日本地図センター
装画
清水公照・藤田道世

正倉院と東大寺

正倉院は東大寺大仏殿の裏北西の位置にあつて、東向きに建てられた高床式本瓦葺の木造建築である。一棟三室からなり北室から北倉・中倉・南倉と呼んでいる。南北の二倉はいわゆる校倉造りである。構内には正倉のほか二つの古い建物がある。一つは聖語蔵という経蔵で約五千巻の経典が納められていた。もう一つは持仏堂といい、この辺りが東大寺塔頭四聖坊のあったところで、東大寺四聖の御影をおまつりしていた。江戸時代、正倉院宝物の点検がここで行なわれていた。

空からみる正倉院（左）と東大寺大仏殿（中央）







正倉院に憶う 白洲正子



正倉院というと、一般には、東大寺のあの正倉院を指すと思われるが、昔は国衙や寺院の主要な倉を「正倉」といい、それが建っている一画を「正倉院」と呼んだ。したがって、律令時代には、日本中のどこにでも見られたが、東大寺だけに遺ったので、固有名詞となって現在に至っている。それにしても、正倉の中の正倉が、度重なる地震や風害を逃れて、千二百年の星霜を経たのは、まったく奇蹟としか思われない。平重衡が東大寺に火を放った時は、奈良の大部分が焼土と化したのが、正倉

院と転害門^{てがいもん}だけは助かった。このことは、それらの建築が占める位置にもよるのだろう。東大寺の境内は広いけれども、その広い境内の西北の隅にあるのが正倉院と転害門で、冬のさ中のことであつたから、風上に当たっていた。大切な倉のことで、はじめから大仏殿とは離れたところに、火災のことも考えた上で造られたに相違ない。それでも私が子供の頃聞いた話では、正倉院はいつでも大切にされたわけではなく、徳川末期から明治維新へかけての動乱期には、あの高い床下に乞食が住みつき、平気で焚火などしていたという。しばしば盗賊におそれられたこともあり、長い年月の間には、何度もそういう危機に瀕したことを耳にすると、なおさら有がたいに思われる。

私の一生の間にも、正倉院にはいくらか変遷があつた。今は奈良の博物館で、年に一回催される「正倉院展」で拝観するより他ないが、昔は宮内省にお願いすれば、曝涼^{ばくりやう}(虫干し)の期間は、院内へ入れて頂くことができた。戦後しばらくの間は、何かの研究という名目のもとに、わりあい簡単に入れたように記憶している。私も父母や先生方のお供をして、何度か拝観する幸運に恵まれた。当時は美術に関する興味や知識がそうあつたわけではなく、文字どおりの「猫に小判」であつたが、それでも見事な校倉造りの内部に、一歩足を踏み入れた時の感動は、未だに忘れることができない。大げさにいえば、天平の昔に還って、大仏開眼の荘厳な風景に、目のあたり接する思いがした。

周知のとおり正倉院は、中倉を中心に、南倉と北倉にわかれているが、飾棚が造られたのは明治時代で、それ以前はすべての宝物が唐櫃^{からび}におさめられていたという。部厚い材を用いた棚の上には、目もくらむような楽器や鏡の類、ガラスその他の宝物が並んでおり、じゅうたんとか厚地の織物などは、十枚も二十枚も重なって、床の上に積んであつたことを思い出す。昔のことなので、私の記憶はさだかではないが、美しい『文櫨木^{ぶんりんぎ}の厨子』、『黒柿^{くろがき}の厨子』、『蘭奢待^{らんじやたい}』の香木など、大きなものは床か台の

正倉院 正倉全景



上に置いてあった。蘭奢待は一米半に及ぶ巨大な香木で、正確には『黄熟香』と呼ぶらしいが、いつの頃から東大寺をかくし文字にして（蘭の門構えの中の東と、奢の冠りの大と、待の作りの寺）、ランジャタイと称するようになったと聞く。

私の母は香道に凝っていたので、門前の小僧なみに私も、この香木の前では長い時間を費やした。表面は何の変哲もない茶褐色の木片だが、断面は白くなっている。時代足利義政や織田信長などが切った跡が残っている。時代

が下るほど、品質の落ちる部分を切っていると、その時母が教えてくれたのは、同じ一本の香木でも、上等の伽羅などがとれるのは、極く限られた一部なのだろう。昔の人々は権力に物をいわせて、心ないことをしたものだが、一片の香木のために、殺し合いまでしたことを思うと、数寄に徹した執心のほども頷けるといえるものだ。

博物館の「正倉院展」では、毎年一つのテーマのもとに出品されるので、私たち素人にもわかりやすい。が、正倉院の中では目移りがして、何が印象に残ったかと訊かれても、にわかには答えられない。私はまだ若かったから、しいていえば、ガラスだったかも知れない。私が最後に正倉院を拝観したのは、たぶん昭和二十年代もはじめの頃で、その後、特別な専門家のほかは禁止になった。それから十年ほど経って、私はイランへ行った。正倉院を通じて、ペルシャ文化にあこがれていたからで、いつてみればシルクロード・ブームの走りである。あわよくば、『白瑠璃碗』と同じものを手に入れたと思うていた。テヘランに着いてすぐ骨董屋へ行ってみると、彼らは既に知っており、覚束ない日本語で、「ショソーンがほしいのか」という。そのショソーンが、次から次へいくつも出て来るのにはびっくりした。全部が全部贋物というわけではなく、たしかにササン朝の作も交っていて、カットやガラスの質も、白瑠璃碗と変るところはない。値段も当時は三万から五万円程度だったが、私は買わずに帰って来た。伝世のものには遠く及ばないと知ったからである。

このことは、正倉院全体についてもいえることだろう。近頃は中国で盛んに発掘が行われている。その中には、正倉院の宝物より立派なものが無数にあり、またこれからも発見されるに違いない。だが、出土品には、伝世のものとの美しさはない。その美しさはまったく異質のもので、日本人だけのことも知れないが、昔の人々が、なぜ伝世品を尊んだか、そこには生きた人間の生活があり、生きた人間のぬくもりが伝わって来ることを、正倉院の宝物を見て切実に感じるのである。





東大寺山界四至図 正倉院宝物



四聖御影(聖武・良弁・婆羅門・行基 東大寺蔵)





正倉院 持仏堂



正倉院 正倉より持仏堂をのぞむ

書跡文書と文房具

聖武天皇の『雜集』光明皇后の『樂毅論』は当代書跡の代表的なものであり、大宝の戸籍をはじめ諸官庁の文書のほか膨大な量の奈良朝の写経関係文書は当時の政治経済文化を語る重要な資料である。東大寺の広大な寺域を示す『山界四至図』や北陸地方にあった東大寺庄園の地図は、強靱な麻布に描かれていて長く保存に堪えしめる周到な用意がうかがわれる。文房具としての筆墨硯竹帙などはいずれも豪華な高級品で当時の顯官貴紳が使用したものだ。



国家珍宝帳 卷姿 正倉院宝物

奉為 太上天皇捨國家珍寶等

入東大寺願文 皇太后御製

妄聞悠々三界猛火常流杳々五道毒
網是壯所以自在大雄天人師佛垂法
鉤而利物開智鏡而濟世遂使擾々群
生入寂滅之域蠢々品類趣常樂之庭
故有歸依則滅罪无量供養則獲福无
上伏惟

先帝陛下德合乾坤明並日月崇三寶
而遏惡統四攝而揚休聲籠天竺菩提
僧正波流沙而遠到化及振旦鑒真和
上淩滄海而遙來加以天惟薦福神祇呈
祥地不惜殫人民稱聖恒謂千秋萬歲合
歡相保誰期幽塗有阻閱水悲涼靈壽無
增穀林搖落隙駟難駐七々俄來茶襟轉
積酷意弥深披后土而無徵訴皇天而不

御軾二枚 一枚紫地鳳形錦 一枚長班錦

紫檀木畫挾軾一枚 著白羅襪

右納漆櫝二合 並居櫛之机

御床二張

並塗胡粉具緋地錦端疊褐色地錦
褥一張廣長巨兩床絳絕給霞一條

右件皆是

先帝翫弄之珍內司供擬之物退感

疇昔觸目崩摧謹以奉獻

盧舍那佛伏願用此善日奉資真

助早遊十聖普濟三途然後鳴鑾

花藏之宮住蹕涅槃之岸

天平勝寶八歲六月廿一日

從三位行大納言兼紫微令中衛大將近江守藤原朝臣 仲麻呂

從三位行左京大夫兼侍從大倭守藤原朝臣 永手

從四位上行紫微少卿兼中衛少將山背守藤原朝臣 福信

紫微大進五位下兼行左衛衛率左右馬監賀茂朝臣 角三

從五位上行紫微少卿葛木連 戶生

金光明最勝王經序品第一

三藏法師義淨奉 制譯

如是我聞一時薄伽梵在王舍城鷲峯山頂
於最清淨甚深法界諸佛之境如來所居與
大苾芻衆九万八千人皆是阿羅漢能善調
伏如大鳥王諸漏已除無復煩惱心善解脫
慧善解脫所作已畢捨諸重擔遠得已利盡
諸有結得大自在住清淨戒善巧方便智慧
莊嚴證八解脫已到彼岸其名曰具壽阿若
憍陳如具壽阿訖侍多具壽婆溼波具壽
訶那摩具壽婆帝利迦大迦攝波優樓頻螺
迦攝伽耶迦攝那提迦攝舍利子大目乾連唯
阿難陀住於學地如是等諸大聲聞各於
晡時從定而起往詣佛所頂禮佛足右繞三
匝退坐一面

復有菩薩摩訶薩百千万億人俱有大威德
如大龍王名稱普聞衆所知識施戒清淨常
樂奉持忍行精勤經無量劫超諸靜慮繫念
現前開闡慧門善備方便自在遊戲微妙神
通逮得熱持辯才無盡斷諸煩惱累深皆亡

紫紙金字金光明最勝王經 奈良国立博物館藏

最勝王經帙 正倉院宝物

